

上宮寺通信

第五十八号

腹籠りの聖教

今年も梅雨の季節がやってきました。ジメジメして身体的には不快な梅雨ですが、雨の日にゆっくりと本を読みながら家で過ごすというのもなかなかいいものです。

いまは本屋やインターネットで好きな本が買えますが、印刷技術が発達していなかった時代には本はとても貴重なものであったのはいうまでもありません。

仏教でいえば特に教えの要が書いてあるような大切な書物は信頼できる門弟にしか書写を許さなかったといわれていますので、それはそれは貴重なものでした。

いまから五五〇年ほど前のことです。本願寺第八代の蓮如上人が吉崎御坊(現在の福井県)におられたころ。

ある日、吉崎御坊で火事が起きたのです。またたく間に火は燃え広がり、堂宇にいた者たちは皆、急いで外へと逃げだしました。

蓮如上人は大切な『教行信証』だけは火から守ろうと持ち出して逃げたのですが、六巻のうち「証巻」だけを中に置いてきたことに気づきました。

「これは一大事!大切な『教行信証』が燃えてしまう」と火の中を戻ろうとするのですが、火の勢いは凄まじくとても中には入れません。そのときに蓮如上人に仕えていた本光房了願が

頭から水をかぶり、きっと火の中に入っていったのです。

しかし、いつまで経っても了願は戻ってきません。やがて鎮火し、その焼け跡から黒焦げの了願が見つかりました。

その姿をよく見てみると、腹の中に何かあります。なんと『教行信証』「証巻」が腹の中に納められているではありませんか。了願は迫りくる火の中で自分の腹を割り、その中に「証巻」を納めて火から守ったのです。

現代ならば、燃えてしまった

も、もう一度刷り直せば一件落着くということになるのでしよう。しかし、当時は『教行信証』が燃えてしまったら「教え」が後世に残らなくなる可能性があります。了願は命とひきかえに

「教え」を守ったのです。

この話は「腹籠りの聖教」「血染めの聖教」として伝えられてきました。

現在、東本願寺から出版されている「真宗聖典」や「勤行集」の表紙は赤色になっています。それもこの逸話が由来になっているといわれています。



東本願寺公式キャラクター「赤本くん」

真宗大谷派の燭台は鶴亀の形をしているのが正式です。

鶴と亀は「鶴は千年、亀は万年」といわれるように長寿を象徴します。これを用いて仏様の「無量寿(限りないいのち)のはたらき」を表しているといわれます。

また、鶴の足は長く、亀の足は短い。長短ともに兼ね備え、どちらかに優劣をつけることなくそれぞれが尊ばれる世界が仏様の世界であるということを表しているともいわれます。



◆行事案内



DE

7月18日(火) 14時開演
上宮寺本堂にて
限定15席
ひとり五〇〇円
申込は上宮寺まで。

◆話題あれこれ

○来る7月18日(火)午後2時より、名古屋を中心に活動している落語家、登龍亭獅鉄さんの落語会を上宮寺本堂で行います。席に限りがございますので、もしご希望があればお早目にご連絡ください。

○上宮寺八事墓地にお墓がある方には今年度の管理費納入のお願いを近々出させていたと思います。なにとぞよろしくお願いいたします。

【雑感】

昨年春に首の後ろにできものができて炎症を起こしてしまいました。切開して膿を出したのですが、医師からは「また大きくなるかもしれません」と言われました。それから約一年、また大きくなってしまいました。これは「粉瘤」というそうで、手術で取り切ってしまうと治らないとのこと。そこであまり大きくならないうちに取ることにしました。手術といっても局部麻酔で20分ぐらいのもの。しかし、いくら簡単な手術とはいえ緊張しました。できればあの緊張感はもう味わいたくないですね。(住職)

【発行】

真宗大谷派

上宮寺

昭和三十九年白金二丁目十九番十五号

☎052-871-0547

